

もうかる農商工連携

秋田市の秋田印刷製本はビジネスフォーム（事務処理用の書式の決まった帳票）印刷では、県内一といわれる設備と技術を持ち、自治体の顧客も多かった。ところが県が積極的に推進した平成の大合併により、69市町村から、平成18年には25市町村へ大きく減ったことで、同社も多くの優良顧客を失ってしまった。

そのころ、同社社長の大門一平さんは20年来の友人で米作農家の伊藤巧一さんから「米を会社で買っ

印刷会社と農家が「農商工連携」して秋田県のブランド米「あきたこまち」を売る。一見、米の生産とパッケージの印刷という農と工の役割分担に思えるが、このケースでは印刷会社が通信販売を利用した商の役割まで担っている。

友人農家からの米の購入話をプロジェクトに昇華



米作農家の伊藤巧一さんが作る「フルーティー米」の収穫風景。廃棄されるリンゴと柿を肥料として利用している。米の袋を開けるとフルーティーな香りが広がる。

▼あきたこまちと県産品のセットが人気。「ごはんのおとも」はからしなすなどのがっこ（漬け物）を組み合わせた商品



社名 秋田印刷製本株式会社
所在地 秋田県秋田市御所野湯本2-1-9
電話 018-839-7554
HP www.akitainsatu.co.jp
代表者 代表取締役社長 大門一平
従業員 51人

てくれないか」と相談を受けた。減反と買い取り価格の下落により、厳しい状況に追い込まれていたためだ。同じような境遇の中で独自の販路拡大を目指す友人に共鳴した大門さんは、会社で米を買っても先が続かないと考え、「一緒に売っていきこう」と商の部分へ踏み込んだ提案をした。それはなぜか。大

印刷会社が契約農家の米を売る 工程管理と土壌改良で相互に刺激

秋田印刷製本 秋田県秋田市

特集①

新たなビジネスを生み出す

もうかる農商工連携

高齢化や人手不足に悩む日本の農業だが、品質や安全性など国産農産物への信頼性は高い。地域の「農」と連携することで、お互いの強みを生かしながら新たなビジネスを展開する地元企業の成長戦略に迫った。

